



世界遺産写真家

富井 義夫氏

PROFILE 1953年、東京都生まれ。東京写真専門学校卒業後、カメラマンに。1990年代から世界遺産の撮影を始める。2006年東京の富士フィルムフォトサロンにて、写真展『世界遺産×富井義夫』を開催し好評を博す。北海道札幌市在住。日本写真家協会会員/世界文化遺産地域連携会議会員/株式会社写真工房 代表取締役。

芸術家になりたいとは思わない。 1枚の写真に夢と感動を紡ぐ、“写真の職人”でありたい。

子供の頃に見たスイス・ユングフラウの美しい風景写真が、いまでも心の裏に焼きついている

編 ご 自宅(札幌・真駒内)にまで取材に押しかけてしまい申し訳ありません。早速お話を伺いたいのですが、窓からの眺めがとても気持ちよいので、つい見とれてしまいます(笑)。

富井 ここ真駒内は、1972年に開催された札幌冬季オリンピックの会場となった場所として、ある年齢の方にとっては懐かしく、また馴染みのある場所ではないでしょうか。ちょうど自宅の裏手が藻岩山で、冬は、そこにあるスキー場からスキーの板を履いたまま、うちの玄関まで下りて来ることができるんですよ。いまはまだ雪が残っていますが、春になれば周囲の木々の葉が一斉に芽吹き、新緑が目には沁みるほど美しく、秋には全山紅葉して、素晴らしい風景を見せてくれます。

編 資料を拝見すると、1990年にこの地に移って来られたそうですが、やはり、北海道の雄大な自然に魅せられての移住だったのですか。

富井 はい。私は東京の北区に生まれ育ちましたが、そこはとても庶民的で、下町の風情を色濃く残したところでした。そんな雰囲気は嫌いではなかったんですけど、やがて学生になり社会人になり、ずっと東京で過ごしているうちに、だんだん堪えられなくなってきたんです。ごみごみ、あくせくした感じが(笑)。

編 それでいきなり大自然を求め札幌へ移られたのですか。

富井 いえ、1988年に株式会社写真工房という会社を埼玉県富士見市に設立し、一度東京を離れたんですが、その2年後ですね。工房も自宅も、思い切って北海道に移してしまいました。

編 写真工房というのは、具体的にどんな機能を果たしているのでしょうか。

富井 私が撮影した写真をレンタルしたり、写真集やカレンダーなどを編集・制作する会社です。いまこの札幌・真駒内には、写真工房本社と屋内・屋外のスタジオ、衣装やメイクアップルームを備えたピンクハウス、そして自宅があります。

編 真駒内を選んだ理由は何だったのですか。

富井 この周辺は自然環境が素晴らしいばかりか、仕事をする上でも大変便利です。札幌の中心部にも近いし、千歳空港に出れば、そこから韓国やオーストラリアに飛べ、すぐに世界各国へ繋がるすることができます。思いついたときに、気ままにサッと出かけられる。海外で仕事をする事の多い私にとって地の利もいいわけです。

編 海外での仕事、富井さんの仕事、と言えば、世界遺産ですよ。いまや海外でも世界遺産写真家の第一人者として知られていますが、若いときから風景写真家を志していたのですか。

富井 風景写真も何も、そもそも私は、どうしても写真家になりたいという強い意思があってこの仕事に就いたわけではないんです。盛り上がりには欠けてすみませんが(笑)。

編 それは意外です。幼少の頃からカメラや写真に興味があり、その頃から撮影をされていたものばかり思っていました。

富井 写真を見るのは好きでしたよ。いまでも覚えているのは、小学生の頃。正月に、貰ったお年玉を握りしめて近所の文房具店に行きランプを買ってきたんです。そうしたら、そのカードの裏面に、ものすごく美しい風景写真が印刷されていてね。スイスのユングフラウという場所。その写真を見た瞬間「なんてきれいなんだろう。いつかここに行ってみたい」と思いました。自分の知らないどこか遠くに、見たこともない美しい世界がある。それに驚き、心を奪われてしまったんでしょう。残念ながらそのランプはもう残っていませんが、そのときのユングフラウの風景写真は未だに色褪せずに、隣の裏に焼きついています。

編 「海外」と「写真」が結び付いた、原体験ですね。その後、学生時代のうちに、渡航の機会はあったのですか。

富井 そんな余裕はまったくありませんでした。私は7歳のときに父を亡くし、18歳のときに母を亡くしましてね。だからとにかく無事に学校を卒業して、すぐにでも社会人として働かなければならなかった、経済的に自立しなければならなかったわけです。カメラマンであれ何であれ、社会に出てすぐには食べていけないような職業は、はじめから考えもせず、高校卒業後は、丸の内にあった会社でサラリーマンとして働き始めました。

編 しばらくは、海外への憧れを封印して。

富井 そのつもりだったんですが、やはり心のどこかに、いつかは海外に行ってみたいという気持ちがあったんでしょうね。勤

めて3～4年経った頃、少し気持ちに余裕ができたのか、「いつか」の海外滞在のために独学で英会話の勉強でもしておくかと、あるとき、会社帰りに書店に立ち寄ったんです。店内で英会話の本を物色していたら、ふと写真学校の学校案内が目にとまりました。何気なく手にとってパラパラとページを繰っているうちに、「写真か。長く続けられる趣味として、案外いいかもしれないな」と思い、そのまま、ふらふらと学校へ願書を送ってしまつて(笑)。もちろん、昼間は働いていますから、申し込んだのは夜間のコースです。22歳ぐらいのときだったでしょうか。

編 潜在意識というのはすごいもんですね。意識が「英会話」に向かっていたのに、富井さんの人生に本当に必要なものを、さりげなく引き寄せてくれたわけですから。



スイス／ユングフラウとクライネシャイデック

いい写真家になる前に よき社会人、よき生活者であるべきだ

編 子供の頃にはあまり縁のなかった写真撮影というものに、社会人になってからいきなり本格的に取り組み始め、すぐに馴染めるものなんですか。

富井 最初は戸惑いもありましたが、学校へ通っているうちに、周囲の友人たちにも触発されて、どんどん面白くなっていきました。小学生のときからずっと憧れていた海外の美しい風景やそこで暮らす人々の様子を写真のフレームに収めていくというのは、もしかしたら自分の夢なんじゃないか。このまま頑張れば、その夢が叶うんじゃないかと思い始めましてね。カメラを持って世界中を回ってみたいという気持ちが徐々に募っていったんです。

編 その頃はまだ「一生の趣味」という意識で?

富井 いえ、やるからには、きちんと仕事として向き合わなければいけないと感じ始めていました。勉強すればするほど、写真の世界の奥深さにも気づかされ、これは一生の仕事にする価値があると。卒業したら何としてもカメラマンになるぞと決心したんです。

編 そして卒業後、本当にカメラマンになってしまった。

富井 会社を辞めて今日からカメラマンになりましたと言ったって、すぐに食べていけるわけではないのですよ。当然生活も厳しくなる。しかし、私には「写真にかける情熱だけは誰にも負けない」という自負がありました。これまで社会人として世の中でしっかり生きてきたという自信だったのではないかと思います。そこが、社会人の経験がなく学生生活からいきなりプロの写真の世界に入ってきた人たちとは少し違う、私独自のアイデンティティーなのかもしれません。プロになるからには、誰もが「い

いい写真家」を目指すわけですが、私はその前に、よき社会人、よき生活者であるべきだと考えています。人間として、生活者としての深みがないと、本来、いい写真は撮れないはずなんです。カメラマンとしてスタートしたときから、いまでも、この考えはまったく変わっていません。

編 スタート当時は、どんなものを中心に撮影していたのですか。

富井 依頼があれば何でも撮りましたよ。スタジオでの人物撮影から商品撮影、仕事をいくつも掛け持ちし、小学校の運動会の撮影まで何でも。今回のFGひろばのような情報誌や雑誌の取材撮影もしましたね。それだけこなしても、写真だけでは自分の結婚資金も捻出できず、2年間タクシードライバーも経験しました(笑)。そんなときでも、写真への情熱と、しっかり地に足のついた生活者でありたいという信念は揺るぎませんでした。

編 そうして地道に仕事をこなしているうちに、憧れの海外での仕事も少しずつ増えていったそうですね。

富井 はい。よい師匠に巡り逢えたおかげで、航空会社の制作物を通して海外にも行けるようになり、旅行会社からの依頼で海外の風景を撮る仕事も増えていきました。

世界遺産と共に、そこで暮らす人々を見つめて 気づいたのは「人間みな同じだ」ということ

編 海外の風景の中でも、とくに世界遺産に興味を持つようになったきっかけは何だったのですか。

富井 あるとき、エジプトのアブシン・ベル神殿を撮影する機会があったんですが、その神殿は「国際的な救援活動により、ダム建設による水没から救われたのだ」という話を聞き、大きな衝撃を受けました。こんなに美しい神殿が、ダムの底に沈んでいたかもしれないのかと。そして、そのときの世界的な救援活動が、後の世界遺産条約の成立に繋がったことを知り大きな感動を覚え、地球上には何としても後世に伝えていかなければいけないものがたくさんあるのだということに気づかされました。それ以来、私自身の、風景や建築物などを見る眼が明らかに変わっていったと思います。

編 地球にとって、人類にとって、大切なものを残していこうという思いは、時代のニーズにもマッチしていたんじゃないですか。

富井 そうですね。90年代に入ると、日本でも世界遺産が注目され始め、関心が高まってきました。ちょうど私も、ライフワーク的な撮影テーマを絞りたいと考えていた時期でしたから、心の奥から沸き上がってきたものと時代のニーズがタイミングよく重なり合うことで、世界遺産というテーマが見えてきた。自分の方向性がはっきり定まっていたわけです。

編 富井さんはこれまで、実に数多くの世界遺産を巡り、次々と素晴らしい写真集を発行なさっています。われわれは、その写真を通じて旅をし心を動かされるわけですが、実際に現場を訪れ撮影したカメラマンとして、とくに印象に残っている場所はありますか。





エジプト / アブ・シンベル大神殿

富井 うーん、たくさんありすぎて、特定するのは難しいですね。私はいまでも、1年のうち150日から160日は撮影の仕事で海外にいます。これまで訪ねた世界遺産は495サイトを超えました。同じ場所を複数回訪ねたこともあります。そんな中であえて挙げるなら、イランのイスファハン、イエメンのサナー、ペルーのマチュ・ピチュ、カンボジアのアンコール・ワット、そしてパリやローマ、ベネチアの街中にある世界遺産も外せませんし、ああ、やっぱりきりがありませんね(笑)。

編 街の中や、遺産の周辺を散策することも多いのですか。

富井 もちろんです。世界遺産というと、雄大な自然の風景や建造物、遺跡類を想像する人が多いでしょうし、それらが重要であることは間違いないのですが、私はそこに暮らす人々の文化や暮らしぶり、在りようといったことにも大いに興味があるんです。世界の街を歩いていると、決して豊かな国ばかりではなく、全体から見れば、貧しさに苦しんでいる人たちの方が多い。私は幸い経験がありませんが、犯罪が横行している場所では、観光客が被害に遭うことも珍しくありません。しかしその犯罪にしても、たいていは貧しさゆえに起こるのであって、人間の本来の姿ではないと私は信じています。撮影で世界中を歩いていると、その地域の住人の、温かい思いやりや親切が身に滲みるんですよ。どの街や村にも、心優しい人々



イラン / イスファハン



カンボジア / アンコール・ワット

が住んでいます。その人たちに助けられて仕事ができ、写真が撮れた、と言ってもいい。民族や宗教や文化は違っても、ごく普通に生活している者が願うことは、やはり家族や隣人のささやかな幸せであり、平穏無事な暮らしなんです。世界を巡って強く感じるのは、結局、人間はみな同じなんだということ。人の温かさや思いやりは、人類共通の、かけがえのない財産なんでしょうね。

編 世界遺産写真家は世界中に何人もいますが、富井さんが目指しているのは、どんな写真なんですか。

富井 地球上には私たちの想像を超えた空間が広がっていて、息を呑むような美しさ、そして言葉では表現できないほどの迫力、神々しさに満ちた場所がたくさんあります。しかし誰もが、いつでも、そこを訪ねられるわけではありません。私は写真を通して、私自身が経験した、身も心も震えるような感動やその空気感までも伝えていきたいと思っています。決して芸術的な写真である必要はない。私はこれまで、芸術写真を撮りたいと思ったことは一度もありません。ごく普通の人々に、この感動を素直に味わっていただける写真を撮りたいんです。たった1枚の写真にも、大きな夢と感動を紡ぐことができる“写真の職人”でありたいと願っています。南へ飛んでも北へ渡っても、山に登っても海に潜っても、いつもそんな気持ちで一心にシャッターを切っています。

写真の世界のデジタル化は、撮影の手法も考え方も、すべてを根本から変えてしまった

編 自然や風景を撮影する場合、気象条件なども関係しますから、いい写真が撮れるかどうかは「その時々の運」に大きく左右されてしまうではありませんか。

富井 シャッターチャンスに恵まれる恵まれないという“時の運”もあるにはありますが、運がいいだけで、いい写真は撮れません。私は海外に出かけるとき、撮影機材と一緒にパソコンなどを持ち込み、気象情報はもちろん、あらゆる角度から現地情報を綿密にチェックして撮影に臨みます。自分が満足できる1枚を撮りたいと思ったら、大量の関連データを事前に集積し、それを読み解く力と経験が絶対になってきます。たまたま運よく撮れた、などという状況はまったく期待しません。何十枚も何百枚も、納得するまで撮り続け、これだという1カットを自らの手でつかみ取ります。

編 それだけの枚数を撮り続けるなんて、フィルムの時代では考えられませんでしたね。

富井 ポジフィルム頃は、海外に撮影に出かける場合、助手と2人で持っていく機材類の重量は100キロを超えていました。航空機内に持ち込める荷物の量の制限もありますし、持って行けるフィルムの数も自ずと決まってしまうんですね。現地で撮



ペルー共和国 / インティ・ライミ



ネパール / ネワール族の女性・ジャガナラン寺院

影を開始し、夢中でシャッターを切っている、その後に回る場所のことなどを考えると、どうしても「枚数を抑えておこう」という意識が働いてしまいます。その点、デジタルカメラなら、基本的には枚数を気にしないで、徹底的に撮り続けられる。それだけ、目の前の撮影に集中できるということです。

編 フィルムの頃とは、撮影時の心持ちが違って来るわけですね。

富井 かつてプロのカメラマンがその存在価値を認められたのは、アマチュアでは扱いが難しかったポジフィルムを使いこなし、作品としてのクオリティを維持できたから、ということが言えると思います。しかしいまでは、デジタルカメラによって誰もがある程度のグレードの写真が撮れるようになりました。そんな状況でプロがプロであるためには、撮影前にどれだけ準備をして、撮影時にどれだけ自分のイメージにこだわって、そして撮影後にどれだけそのイメージに近づけて画像を調整できるか、にかかってくると思います。

編 デジタル時代になって、撮影後のカメラマンの仕事が増えてしまったと嘆く人も見かけますが。

富井 私は自分が撮影した写真は自分で整理しないと気が済まない性格なので、一度に何百枚もの写真データをすべてきちんとチェックします。そして、膨大な点数の中から自分が納得したものを厳選し、その画像に対し、自分が現地で受けた感動のイメージに限りなく近づけるためのレタッチや色補正を施します。この作業は、確かに、とても時間がかかります。体力も気力も必要です。写真家の中には、フィルム時代と同じように、撮ったらそれで自分の仕事は終わりだと考えている人もいますが、私は違います。

編 RAWデータを出版社や印刷会社のレタッチ部門に渡し、現像も補正もお任せしますというパターンもありますね。

富井 私の場合は、会社のスタッフと一緒に、写真集やカレンダーの企画から出版・販売まですべてに関わっていますから、撮影・データ整理・色補正・色校正など、最初から最後まで自分の信念を貫き、仕事に責任を持ちたいと思っています。

編 富井さんが目指す、まさに写真の職人そのものですね。職人というのはアナログのイメージがありますが、富井さんはデジタル化されてからもその意志を貫いているところがすごい。

富井 写真家の仕事がデジタル化により大きく変わったとき、私自身気持ちを切り替え、仕事の仕方を大きく変えようと思いました。そのときに拠り所になったのが、「強い者や賢い者が生き残るのではなく、変化に対応できた者が生き残る」という言葉でした。

編 進化論を唱えた、チャールズ・ダーウィンの考え方を示していると言われる名言ですね。

富井 これを紙に書いて自分の机の前に貼りました。この言葉を肝に銘じ、急進するデジタル化の中で、写真家としての自分の物の見方、ビジネスに対する考え方も柔軟に変えていこうと。実際、変えることができたと思います。「変化に対応した

者が生き残る」という考え方の正しさは、実際にガラパゴスの世界遺産を撮影していたときゾウガメの生態や水陸両棲のイグアナを目の当たりにし、実感として確かめることができました。彼らは島の環境の変化にいち早く対応したからこそ、いまがあるわけです。

編 せっかく環境に対応し生き残った生物を絶滅に追いやってしまうのは、むしろ人間なんですよね。世界遺産の保護と共に、貴重な生物の種を守るためにも、私たちはもっともっと自然との共存共栄を真剣に考えていかなければいけないのではないかと思います。

富井 その通りですね。

編 まだまだ伺いたいことはあるのですが、時間も限られていますので。本日は朝早くからご自宅にお邪魔してしまい、失礼いたしました。

富井 いいえ、どういたしまして。私は日本にいるときは、毎朝4時に起きて仕事をしていますから、これぐらいどうということはありません(笑)。いつも、会社のスタッフが出勤してくる前に、ひと仕事終わっています。365日、朝から晩まで、写真が私の生活のすべてと言ってもいいですね。楽しみは、空いた時間を見つけテニスで汗を流すことと晩酌くらいかな。もちろん、プロとして撮影に支障があっては大変ですから、健康には充分注意して飲み過ぎないように気をつけていますよ(笑)。

編 FGひろばが今号(158)から全面リニューアルしたのですが、表紙も一新し、富井さんの世界遺産写真を毎回シリーズで掲載させていただくことになりました。しばらく、色校正のやりとりなどでお世話になるとは思いますが、よろしくお願ひします。

富井 こちらこそ、よろしくお願ひします。

